

ドラゴンと巫女^{みこ}

立川 みどり



otherworld(アザー・ワールド)

1 ひとりぼっちのドラゴン

むかしむかし、とおい北の国に小さな湖がありました。湖には、一頭のドラゴンが住んでおりました。

ドラゴンは生まれたときからひとりぼっちでした。この湖にしばらく住んでいたドラゴンの一家がひっこしたとき、タマゴをひとつだけわすれていき、そのタマゴがかえたのです。

けれども、ドラゴンはそんな事情を知りません。生まれたときからひとりだったので、だれも教えてくれなかったからです。

ドラゴンには小さな黒いつばさがありました。それで、ドラゴンは、いつか空を飛べるようになり、なかまをさがしにいきたいと思っていました。空を飛ぶ鳥たちにも、湖を泳ぐ魚たちにも、岸辺に住む人間たちや動物たちにも、それぞれなかまがいるのですから、じぶんにもなかまがいるのではないかと思ったのです。

その夢をかなえるため、ドラゴンは、水鳥たちをお手本にして、空を飛ぶ練習をしようと思いました。

でも、鳥たちのようにいくらつばさをはばたかせても、空を飛ぶことができません。ちょっと飛びあがっても、すぐにどすんと地面におちてしまいます。

鳥たちはそれを見てわらいました。

「太っちょドラゴンくん。そんなに大きくて重い体に、そんな小さなつばさでは、とても飛ぶことはできないよ」

ドラゴンは悲しくなりました。

「どうしてぼくは飛べないんだろう」

「人間ならわかるんじゃないのか」と、一羽の水鳥がいました。

「人間には、いろいろなことをよく知っているものしりな人がいる。それに、本ってものをたくさんもっているんだ。本には、ぼくたちが知らないようないろんなことが書かれているんだ」

「よし、人間に教えてもらいにいくことにしよう」

ドラゴンは人間の村にむかって泳いでいきました。

けれども、人間たちは、ドラゴンを見ると、こわがってにげだし、家の戸をしめて閉じこもってしまいました。

「ちょっと、もしもし、聞きたいことがあるんだけど」

よびかけても家からでてきてくれません。

「あもう。もしもし」

一軒の家に手をかけてゆさぶると、家はグシャッとこわれてしまいました。家にいたのは女の人がひとりで、「キャーッ、キャーッ」とひめいをあげています。

「ちょっと教えてほしいんですけど」

ていねいに話しかけましたが、女の方はますますこわがって、「キャーッ、キャーッ」となきさけぶばかりです。家をこわしたのがまずかったのかもしれない。

とうとうドラゴンはあきらめて、湖のむこう岸にあるじぶんのうちに帰りました。

2 なかま

ドラゴンが帰ったあと、村の村長は、少しはなれた町にある神殿に相談にいきました。

神殿というのは、いろいろな神さまをおまつりしているところです。村長は、ドラゴンがまたおそってくるのではないかとおそれ、神さまに助けてもらおうと考えたのです。

神殿には、巫女とよばれる女の子たちが、神さまたちにつかえていました。そのなかに、ミラという名の巫女がいました。

「わかりました。わたしがまいりましょう。わたしは、水の神さまにつかえる巫女ですから、湖のことなら、わたしの役目だと思います」

ほんとうのところ、ミラもドラゴンはこわかったのです。ドラゴンのなかには、人間を食べてしまうような、こわいドラゴンもいると聞いたことがありましたからね。

でも、村の人たちがこわがっているのを、ほうっちはおけません。それに、その湖のドラゴンは、家をひとつこわしただけで帰っていったというのですから、それほどこわいドラゴンではないかもしれないと思ったのです。

ミラは、湖にやってくると、小舟で湖にこぎ出し、よびかけました。

「ドラゴンさん、ドラゴンさん。わたしの声が聞こえたら、返事をしてくださいな」

ミラの声は、ドラゴンのところにもとどきました。

このあいだ村をおとずれたときは、人間たちはみんなこわがっていて、だれとも話をする事ができませんでした。ちゃんと話のできる人がきてくれたようです。

そう思って、ドラゴンはよろこんでミラのところに行きました。

「はい、こんにちは。きてくれてありがとう」

ドラゴンがやさしそうなので、ミラはほっとして、たずねました。

「このあいだ村にやってきたのは、どんなご用だったの？」

「ぼくは空を飛べるようになりたいの。それで、人間に空を飛べる方法を教えてもらいたかったんだ」

「空を飛べる方法？ あなたは空を飛べないの？」

「うん」

「へんねえ。ドラゴンは空を飛べるものだって聞いたけど。神殿にもどってしらべてくるわ」

ミラはそう約束して、神殿にもどりました。

三日後、ミラは湖にもどってきました。

「ドラゴンさん、わかったわ。あなたはまだ子どもだから、空を飛べないのよ。おとなになったら、もっともつばさが大きくなって、飛べるようになるわ」

「そうだったのか。じゃあ、どのぐらいしたら、おとなになれるの？」

「ドラゴンは長生きだから、だいぶん先みたい。あと何十年か待たなければいけないわ」

ドラゴンはなきだしそうになりました。

「そんなずっと先なの？ それまで、ぼくは、おとうさんやおかあさんにも、なかまにも会えないんだ」

「空を飛んで、なかまに会いにいきたかったの？ この湖に、ドラゴンはあるあなたひとりしかいないの？」

「うん」

ミラは、ドラゴンがかわいそうになりました。そこで、しばらく考えこんでからいいました。「じゃあ、あなたがおとなになるまで、わたしがあなたのなかまになってあげる。それではいいや？」

「ううん。ほんと？ほんとにぼくのなかまになってくれるの？」

「ええ」

そうって、ミラはドラゴンといっしょにくらすことになりました。

ミラは巫女なので、神殿にときどき仕事に出かけますが、かならずドラゴンのところにもどってきます。そんなくらしが、ミラもドラゴンも気に入っていました。

3 旅立ち

長い長い年月がすぎました。ミラはおとなになり、やがて年をとっておばあさんになりました。もう、ミラはあまり歩くことができません。ずっとベッドに寝たきりです。

そんなミラのために、ドラゴンは山でめずらしい薬草をとってきて、薬をつくります。薬のつくりかたは、ずっといぜんにミラに教えてもらったのです。

いまでは、ドラゴンはまだほとんどおとなになっていて、高くてけわしい山のてっぺんにも、薬草をさがしに行くことができます。その気になれば、なかまをさがしに行くこともできるでしょう。

けれども、ドラゴンは、今ではなかまをさがしにいきたいとは思いません。ミラとずっといっしょにいたいと思っています。それで、飛べるようになったことを、ミラにかくしていました。

「ドラゴンさん」と、あるとき、ミラがいました。

「ほんとうはもう、飛べるようになっているのでしょうか？ それなら、なかまをさがしにおいきなさい」

「ううん。ぼくはずっと、ミラといっしょにいたい」

「ありがとう。でも、それはむりなの。人間の寿命は、ドラゴンよりもみじかいの。わたしは、もうその寿命がきてしまうの」

「そんなの、いやだ」

「どうしようもないことなのよ」

「じゃあ、そのときまでそばにいる」

ミラは、しなびた手をのばしてドラゴンの頭をなで、ほほえみました。

「ありがとうね。空を飛べるようになったのに、ずっとわたしのそばにいてくれて」

それから何日かあと、ミラはしずかに息をひきとりました。

ドラゴンは、なきながらミラのお墓をつくり、花をかざりました。

「ありがとう、ミラ。ずっとそばにいてくれて。ミラには人間のなかまがたくさんいたのに、ぼくといっしょにいてくれて。ぼくは新しいなかまをさがしに行くけど、ミラは最高のなかまだったよ」

そうやってミラに別れをつけると、ドラゴンは、いまではすっかり大きくなったつばさを広げて、湖を飛びたっていったのでした。

ドラゴンと巫女

<http://p.booklog.jp/book/78573>

著者 : other-world (立川みどり@アザー・ワールド)

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/other-world/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78573>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78573>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ